

---

# このこのこ！～男の娘のこんな日常～

凪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「このこのこ！～男の娘のこんな日常～

### 【著者名】

IZUMI

### 【作者名】

IZUMI

### 【あらすじ】

私立天翔学園高等学校　この学校に入学したのは、ゼンマイでもいるような男の娘！？

## プロローグ 「主人公は××系」（前書き）

不定期更新になりますが。よろしくお願ひ致します。それじゃあ主人公のアカリちゃんヨロシク。

「僕の名前は、アカリじゃないです。えーっと、このセリフ読めばいいんですね。こほん、青春に必要なのは、「友情」「ラブコメ」

「男の娘」・・・って僕は男の娘じゃなーーい！！

## プロローグ 「主人公は××系」

「用アカリさん好きですっつーー付き合ってくださいっつーー」

2011年 春 4月も終わりに近づき今年僕は、必死の受験勉強の結果無事合格した「私立天翔学園高等学校」の体育館裏に呼び出されて今までに告白された。

「無理です。」

それを僕はソッポーで断る。

「・・・・・えつ？」

「それじゃあまた明日。」

僕は今告白断つた田中君（多分）の横を通り過ぎ去りながら「ちょっとと待ってくださいー！」

田中君（多分）に道を塞がれた。

「どうじてですかー？せめて理由こやつ少しでいいから考えて

くれまっ「無理です。本当に。」

僕は、わざわざ告白を断つたときより早く返事をする。

「だからなんでっ」

「落ち着いて、別にぼくは田中君のことを嫌つてないし嫌悪感すら持つてないよ。逆に友達になりましょうって言われたら嬉しいぐらいだし。」

「じゃあ友達以上にみえないって」と、後、田中じゃなくて田代です。」

と田中君じゃなくて、ええっと田代君だ。は冷静にソッポーをいれ

ながら覗き返してきた。

「いや・・・その・・・なんといつか・・・やの、  
実は僕、この手の芸能の返事は中学生時代からなれてくる。しかし、  
理由の説明だけはどうともなれない。むしり、ある意味なれたくない。  
ない。

「こいつ言わなくちゃダメかな?」  
むしり、言いたくない。

「はいっ」

田代君はさきっぱり返事をした。

「僕はあらかじめ明確な理由で田さんを好きになりました。例えば・・・」

田代君は頼んでもいないのに、僕の好きな理由をきちんと説明して  
いった。・・・はあ百パー セント理由行つた後の傷口広くなるよな  
ああますます言いたくないあ。

「例えば、田さんの透き通るようなソプラノ声は誰の心中にも染み込  
んで心地よくて、」

・・・いやいや僕にとつてそれはコンプレックスの一つなんだけど。

「そして田さんの髪は、まるで芸術品のようにサラサラで、  
あつ今のは少し嬉しかったな、高いリンクスにはちみつ入れた特性リ  
ンス使つてゐからね。これが結構髪にいいんだよね。

「もちろん外見だけじゃないです。」「  
まだ、あるのかあ。

「」の前の調理実習のときに作ってくれた。あの炒め物すん、」くお

いしかつたです・・・」

いやつあれは結構手抜き料理なんだけど。

「そして、このまえ僕の制服のボタンがとれた時のあの裁縫の腕前。はつきり言ってプロ級です。」

裁縫にプロ級とかあるのかなあ？

「他にも・・・」「うん、分かつた。分かつたからもうやめて。」  
やばい、本当にいい國らくなつた。

「それじゃあ、お願いします。それひとした理由を説明してくださ  
い。」

もつ、嫌だ逃げ出したい。てゆーかそんなに僕のこと見てるなら理由にきずけよつ！別にその理由隠してないし、なんで逆にきずかないのーー？もうーーー本当に。これはもう腹をくくるしか無いのかーー！

「円さん、お願ひします。振られるのは仕方ないけれど、理由もなしに振られるのは嫌です。」

田代君は、追い打ちをかけるように迫ってきた。いや、だからさ理由聞いて傷つくレベルがもう核爆弾並みなんだよ経験から。

「う、あ、その、あの、い、せ、

「月さん！」

……もう無理、この状況もう無理。

僕は腹をくくつた。

「田代君。」  
「はい。」

「・・・・・えつ？」  
「僕の苗字が月明狩なんだ。」

田代君が慌ててあやまる。逆に謝りたいのこっちなんだけれど。

「本業のことは、間違われぬ。」

卷之三

「そつそれで、本当の名前が、その、えつと。り、、、つて書うん  
だナダ」。

「えっ？ すいません聞こえませんでした。」

「えつ？」

『 』

「はいっ？」

「ぼつ僕の本名は、月明狩竜人」

田代君はよつやく気がついてくれた。

そう、僕、月明狩 竜人りゅうじんが

男だということに。

## 第一話 「幼馴染は狼系」

2011年4月26日

「ん――――っ・・・ふう。」

僕は自室で大きく背伸びをした。

「そ・て・と」

「ピピッ」と鳴った携帯のアラームを素早く止めて、時間を確認した。

AM4時30分

「よし、時間ぴったし。」

これは僕の癖で、アラームが鳴る1分前には起きて背伸びなんかしたりして本格的に準備をしようとするものだ。そして、なんでこんなに早く起きるかと言つと僕には色々仕事がある。

「今日のお弁当はどうしようかなあ。」

僕は、寝巻きの上からポンチョを着てつぶやいた。

「セイヤはもう少しお肉食べたいって言つてたけど・・・栄養バラ  
ンスかんがえるとなあ。」

セイヤと言つるのは僕の幼馴染でれつきとした女の子なんだけど・・・

まあ説明は後にして、やることせんなくけやー

「んーと、昨日はハンバーグだったから少し焼かなかつたあまりがあるから。うん、ピーマンの肉詰めにでもするか。後他にも・・・  
そんなことを考えながら、洗濯機のあるお風呂場にいく。

「その前に、洗濯物干さなくちゃ。」

すぐに頭を昨日の天気予報に切り替える。確かに今日は、晴れだったはず。一応テレビをつけて、確認する。・・・うん合ってた。

「口姉は好き嫌い激しいからなあ、今日まだつづよ。」

（1）

時間後

「ふう。」

僕は、あさの仕事を一通りかたづけて口コアを飲んでいた。

「全く、セイヤはあれほど何回も注意してゐるのに下着を洗濯機に入れるんだから。」

ぶつくさと文句言いながらココアを一口飲む。うん美味しい。

「僕だつて思春期の男子なのになあ。」

本当は狙つてやつてるのかな？ いやないか、そんなことしてもあまり意味ないしね。

「多分もう無意識のうちにやつてるんだろうな。」

まあその理由もわからなくはない。ふと、窓ガラスに写った姿を見る。そこには、寝巻き姿の上にポンチョを軽く羽織つた髪の長い綺麗な美少女がいた。

「・・・・・てゆーか、僕なんだけね。」

はあああああああ 口に出すとなお落ち込む。

そう、僕「月明狩竜人」は見た目は完全に女の子だ。  
つきあかり りゅうと

この見た目のせいで、僕は大変な思いをしてきた。

例えば、昨日の田代君のような例 あれが一番困る。なぜなら、A君と言う人がいたとする。A君と僕は普通に仲良くしているとする。同性なんだから当たり前だろう? それなのにA君は完全に僕のことを女の子だと思う。

僕の通つている「天翔学園高等学部」略して、「テンガク」はそれなりにマナーを守つていれば私服登校OKなのだ。僕は数少ない制服組みで、この見た目との相乗効果でさらに目立つてしまつ。しかし、この時代「ボーイッシュ」というような言葉もあるし、「ボク娘」と言うことはある。簡単に言つてしまえば、僕を女の子と勘違いするのは当たり前というものだ。しかし、自分のほうから「僕は男だからね。」と言つのもなんかプライドみたいなものが許さない。そんなこんなで僕は、週2のペースで告白されてしまう・・・

- ・ 男子から。

ちなみに、僕の幼馴染が僕のことを「アカリ」と呼ぶのでよく本名を「月<sup>つき</sup>アカリ」と勘違いする人も多い。

「まあ、後数週間すれば僕が男だつてことが分かつてくるだろうな。経験からして。」

僕は、ココアを飲みきつてかたずける。今の時間は5時38分まだ時間はある。

「さてとお風呂にでも入ろうと。」

僕はお風呂場に向かつた。僕は、お風呂が大好きだ。細かく説明すると髪を洗うのが好きだ。そのため、特性リンスを作つたりして髪の手入れは欠かしたことがない。こうゆう所も、セイヤに女子つ

ぽいていわれるけど。好きなんだから、しょうがないしょうがない。

「ん～ん～ん～ん～ん～ん～ん～」

僕は服を脱ぎ始めながら鼻歌を口ずさむ。そしてシャワーを浴び始めて、髪を洗おうとシャンプーに手をかけたとき・・・

「あっ」

しまった、着替えを忘れてしまった。けど今脱いだ下着着るものなあ。

「仕方ないか。」

僕は、シャワーを止めて体と髪を軽く吹いてバスタオルを体に巻いて自分の部屋に戻った。

ドアを開けたとき、ふと違和感があった。

「・・・ベットが乱れてる。」

それだけじゃない、下着をしまつているタンスが少し開いている。さらにベランダの窓が開きっぱなしだ。洗濯物を干したとき鍵を締め忘れていることはじつは多い、しかし学校に行く前わ必ず確認するので防犯に関しては大丈夫。だけど、窓を締め忘れるなんてありえない。そして決定的なのは・・・

「・・・は・・・あ・・・はあ・・・」

微かに聞こえる人の呼吸音しかもクローゼットから。

「・・・（ゴクリ）」

僕は少し緊張しながらもクローゼットに手を掛け・・・思いつきり

開けた。

アーチー・スミス

卷之三

「……………何してんの……………セイヤ」

「ソノ」

呂氏春秋

源氏物語

目の前にいるのは「澄空星夜」  
すみぞらほしよ 僕の幼馴染で通称セイヤ  
一人称は

アベノミ

少し赤みがかつたショートヘアで結構傷んでいる イメージとしては「狼系少女」しかしそれは見た目だけで中身はほぼ「犬」胸はとても残念 セイヤの家は隣で、ベランダとベランダの間は1メートルも無いジャンプして渡れる距離だ しかもセイヤは成績と反比例するほどスポーツ万能で「テングガク」にギリギリ合格したのも奇跡だと思う・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

うんだいたいこんなもんかな。よし！ ！

「セイヤ」

「…なつにアカリ」

いくつか質問していき

卷之五

質問その1ベットが舐れても何なんですか

僕は淡々と質問する。

「さつさあねえなんでだろうね！アハハハハ  
」セイヤはわざとらしく笑った プチッ

「そりゃ……質問その2……僕の下着をしまつてるタンスが少し  
開いてるんだ。それでさあその手に持つてるの何？」  
僕は続けて質問する。

「あの……その……あ―――――いつのまに！」  
セイヤは大げさに僕の下着を見てリアクションを取る。 ブチッ

「じゃあね最後の質問いい」  
僕は冷たい声でセイヤに聞く。

「なつなに」  
セイヤは怯えた声で返事をする。

そしてきつぱりと僕は言つ。

「死ぬ前に何か言いたいことある」

「・・・・・」

セイヤは凍りついた。

「さあ、早く」

自分でも信じられないほどの怒りを抑えるの難しいから早くして欲  
しい。

「・・・・・分かった。アカリ聞いてくれ。」

「つ！ なつなに。」

急に真面目になつたな、もつもしかしてわざとじやなくて何か理由  
があつたとか

• • • •

—  
•  
•  
•  
•  
•

「・・・・・アカリってやっぱり大事な所隠すと百パーセント

女の子だよな。

「へつ！？・・・・あつ

今の自分はバスターク姿と違うことを忘れていた。

「いや――――――！眼福 眼福」

ブッチン

「えつ、今の音「死ね———————  
———————」つつこの変態オオカミ———————  
———————」

僕は机の上の分厚い参考書を思いつきり叩きつけた。

「ワオ――――――」

## 第一話 「運命の少女は毒舌系」

2011年4月26日

「すいませんでした！…」  
セイヤが土下座している。

「知らない！！セイヤなんてもう知らない…」  
「…」

僕は、自分でも分かるぐらじ日に涙を貯めて起きていた。

・・・あっ、ちなみに土下座してるのはがヒロイン（一応）で怒ってるほうが主人公（一応）です。普通逆だと思つけれど、まあ色々あるんです。

AM7時03分

セイヤに一撃くらわせた後、さすがにやりすぎた…とは思わず。としあえず僕の部屋にセイヤ改めこの犬っこを置いておくとまた何かされそうなので、ロビングのソファに放置していた。そして約1時間後セイヤが復活した。

そして、第一声が…：

「うーん、よく寝た。さてアカリの部屋あさりに行くか。」

んで、直後僕がいること気がついて僕とのやり取りを思い出していく頭のシーンにつながる。

「なんで起きたら僕の部屋をあさりに行くんだよ。」

「本当にごめん！」

「知らないつたら知らない！」

「とりあえず、お願ひだから朝一はん作つて！」

「今言ひ」とか―――つ―――！」

「だつて、アカリがアタシの分の

!

「今そんな話してないでしょう？」

「じゃあ、なんの話？」

「だ、か、ら、！、！  
は、あ、も、う、い、い、や、。」

怒り疲れてどうでもよくなつてきた。

「じゃあ、朝ごはん作ってくれる?」

「罰として朝」はん抜きー！」

「ワオ――――――ン！！」

ここまで状況説明。朝から飼い犬のしつけをしています。

「ウニ」  
「ウニ」

「全く、なんであんないたずらするかな本当に。」

「アーネスト・ヘミングウェイ」

「落ち着け、完全に犬化してゐぞ。」

冷静に突っ込む。

「スーサースー・ハ・・・・あーあーよし戻つた。アカリさ、一応ア

タシ高一女子なんだよ！」  
深呼吸で戻るんだ。

深呼吸で戻るんだ。

「だからなに。

「いやいやいや！だから……その……なんでもそんなこと  
たかを聞かない？」

「……んでもいいえば、じゃあなんで？」

卷之三

「えっ、じゃないでしょ。朝忙しい時にあんなことして、何か理曲あるんでしょうか? まう行つて一覽もつ怒んなのか。

第一聞けと言つたのはセイヤのほうだ。

「いや……その……だから……あたしは……あなたが……すく

「あつ時間だそろそろいかなと遅刻しちやう。行くよセイヤ。」

携帯のアラームを止めて詰う。

「えついやまだ理由言つてないし、着替えてないし、何より朝」は  
うむ?

「だからないよ。」

「ワオ――ン」

先行くよ

「二つで御座ります。あつ健二〇〇九一月三日。」

締つよひしへ

そう言い残し駆け足で家を出た。

「ワンダラニ」「バタン」

さて急ぐか。

「テングガク」は大通りに出れば、直線で距離もそんなに無い。しかし、その大通りにでるには僕の家と「テングガク」の位置の関係上こそこの道を歩かないといけないのだ。そこで僕は・・・

「仕方ない、時間ないし「暗闇通り」を通るか。」

暗闇通りと言うのは、学生などが遅刻しそうなときに使う裏道だ。ビルと雑木林に挟まれていて、いつも暗いのでその名が付いた。学校側はひつたくりなのが多い・不審者がいるなどの理由で通ることを禁止しているが、背に腹は変えられないのでしょうか。

「（）が暗闇通りか確かに暗いな。」

実は僕この暗闇通り使つのは初めてである。

「なんせいつもは、余裕をもって家から出るものな。」

ちなみにセイヤはいつもギリギリでこの暗闇通りの常連らしい。後、セイヤのご飯はいつもはきちんと作ってはある。

「飯抜きは少しひどかったかな?いやいや、あんぐらい当然だよ全く・・・そういうば、いたずらの理由なんだつたんだろう?・・・

まあいいか。」「

そして暗闇通りを4分の3ほど通り過ぎたかなと考えていた頃。いきなり後ろから声をかけられた。

「おいー！そこのねえちゃん！」「  
・・・無視して走る。

「お前だよ、そこの学生服のお前！」「  
・・・はあ、分かっているけどやつぱり僕か。

「・・・・なんですか。」

動かしていた足をとめて後ろを振り向くと、どこででもいるような。したつぱAみたいなおじさんがいた。

「ちょっと、金貸してくんないかんあ。困つてんだよ。」

うわあ、ひぐぐらい典型的なカツアゲのセリフだな。後、カツアゲするやつの性別ぐりこきちんと見極める。

「・・・残念ながら僕お弁当派なんで、購買用のお金すら持つて無いんですけど。」「

「んじゃあ、手間が省けたな。」「

「はつ？。」「

「金が無いんじゃしうがねえ・・・体で払つてもらおうか。」「

パチンとしたつぱAが指を鳴らすと雑木林から7人ほど似たような奴らが出てきた。そして最後に、がたいのでかいグラサンをかけたいかにも「一番強くて偉いですよ」オーラを出したボスみたいな人が出てきた。

「あ～～なるほど、そうゆうことですか。」

「そうゆうことだよ、ねえちゃん。物分かりいいじゃないか。」

したつぱAに代わってボスっぽい人が口を開いた。

「そうですか。・・・つまりここに居る皆さん僕のストレス発散に付き合ってくれる。・・・そういうことですね。」

僕は少し笑顔でいった。

「　　・・・・・」数秒の沈黙。

「ククク・・・あつはつはつはつはつは」

ボスっぽい人が笑い、それに続くようにしたつぱたちも笑い出した。

「馬鹿かお前、恐怖で頭おかしくなったのか？」

「いえ、全然」

「あつ！！」

少しキレた様子で声を上げる。

「第一僕は、結構頭の良い学校でそこそこ上位常連組なので頭は良  
いほうですよ。」

「そうゆうこといつてんじや・・・あ～なるほど。」

「どうかしましたか？」

「残念だがその手にや乗らぬーよ。お前、俺様の直感だが格闘技か  
なんか出来るんだろ？」

「ええっ・・まあ・・そーしゃー。」

意外に鋭いなボスっぽい人。

実は僕父親が格闘家で一応基礎は小さい頃叩き込まれた。

「つまり、お前は複数対一人でもズブの素人の集団にやられるわけないと考へているんだな。」

「ええっと・・・近からず遠からずですかね。」

「残念だつたな、俺たちは素人じゃねんだよ。俺たちは全員格闘技経験者だ。」

「あつ そうですか。」

そろそろボスっぽい人の説明あきたなあ。

「さらに教えてやるよ、俺の通り名を。」

「通り名?」

そんなんもんあるのか意外に強いのかもしれないなこのボスっぽい人。

「俺の通り名は 「月の狩人」<sup>つきかりゆうじん</sup> だ!」

「・・・・・・」

「どうだ驚いたか、あの伝説の不良は死んでなんかつたんだよ。」

ちなみに簡単に説明しておくと「月の狩人」と言つのは、2年前1年しか活動しなかつたのに、この街の不良・ヤ・ザ・指名手配などの無法者達を問答無用で病院送りにし突然姿を消した死亡説もある伝説の不良だ。

「・・・・」

「どうした、驚きすぎて声もでなくなつたか。」

「あの、言いすらいいんですけど。」

「なんだ？」

「あなた「月の狩人」じゃないですよ。」

「なつなんだと！！」

「だつて・・・」

「そう、そのとつりだ黒髪意外ブス女！」

「だつ 誰だ。」

うん、確かに誰だ今俺しゃべつてたし黒髪は認めるけど女じやねえ  
し。それ以前に、とんでもないこと言わなかつたか？

そんなことは露知らずカツアゲグルーピに割り込んできたそいつは  
間髪いれずに話し続けた。

「いいか「月の狩人」はてめーみたいな××が小さい代わりに図体  
でかい 野郎じやなくてそこの黒髪意外ブス女の真逆の色でてめ  
ーみたいな 野郎の 色の髪とは比べ物にならないほど綺麗な  
白髪で爪はてめーみたいな 野郎の豚足とは比べ物にならないぐ  
らいとても鋭く大きく美しんだよこの「ピ――――」で「ピ――  
――」な「ピ――――」が分かつたら「ピ――――」しながらと  
つとと帰れ「ピ――――」が分かつたら「ピ――――」しながらと  
―――― 野郎。」

· · · · 「 」 超沈默

超沈默

一 ちやあああん!「

ま、ま、でください親分！！」逃げ出すボス。ほい人＆

あわせは達

ハツ いけない俺もひつくりしすぎてフリー<sup>ズ</sup>してた。

改めて毒舌の人を観察する。内面の第一印象としては、「毒舌」意外なんにも無いが。見た目は、中性的なイケメン？で突き刺すような鋭い目付きで、髪はセイやより少し長いから。セミロングとショートヘアの中間ぐらいで・・・そんなことを考えたら毒舌さん（仮名）が話しかけてきた。

「おー、黒髪。」

「なつなんですか?」「

「「テンガク」つてどっちだ。」

「えつと・・・あっちです。」

「・・・・・嘘付け俺はあっちから来んだ。」

「・・・・・本当です。」

「・・・・・」

「・・・・・」

「そうかじゃあな。」

こうして僕はセイヤが来るまでその場に立ちぬくして、一緒に遅刻した日。

僕は出会ってしまったんだ。

曇日陽射くもりびひざこといつある意味運命で結ばれた女の子に。

## 第三話 「転校生は知り合いで系」

2011年4月26日

「んで、いりあるとこの公式に当たると言ひとんだ。ここのテストに出るからなー。」

きへんじへんかへんじへん

「うつし、授業終わり。解散、あーー腹減った。」

男の数学教師は、テキトーに終わりにしてクラスメイト達は昼ご飯のしたくをする。

ちなみに今は説明するまでもなく昼休み。

さてと、僕も昼ご飯にしようかな。

ダダダダダダダダダダダダ ガラガラバン

「アカリ、じはん」

犬がやつてきた。

「澄空さん、何回言つたらわかるの。廊下は走らないの。」

「だつてだつて今日アカリ朝ごはん作ってくれないしさあ。」

「自業自得」

「うへーおかげで今日の抜き打ち小テスト1問も解んなかつたよ。」

「いつものことでしきう、全く澄空さんは少しも勉強しないの?」

「うんー。」

この犬つじね、元気に返事する場面じゃないだらう。

ちなみに僕とセイヤは1組と6組で離れているクラスなので、家にいるとき意外は昼休みと帰り道しか一緒にはない。

「あとさあアカリ。」

「何？」

「その澄空さんってやめてくれない？」

「なんで？」

「なんでって、いつもはセイヤだから調子狂うし。なんか・・こいつ・ムズムズするし。」

あーーそういうえばきちんと説明してなかつたな。

「澄空さん耳貸して。」

「あつうん。」

(だつてセイヤって呼ぶと色々尊が立つんだよ。)

(尊なにそれ?)

(僕とセイヤが付き合つてるつて尊。)

「えっ！アタシとアカリって付き合つてたのーー！  
ズコッ 相変わらず理解力の乏しい犬つころだな。

「いや、そうじゃなく、アカリがアタシを犬扱いするのも今朝の参考書アタックもそーゆうことをするまえの訓練いや調教！つまりアタシがアカリの本当の犬になつてワンワンする日いつか来るつてことつまり・・・・・・・・」

なんかセイヤがブツブツ言い出したりハアハアしだした。

「おーいセイヤ。」

「さらに・・・して・・・だから・・・」

「セイヤー！」

少し声を強めて呼ぶ。

「はっはい！第一希望は普通でアカリの部屋がいいです。」

「セイヤなんの話してんの？」

「いいや・・その・・そつそついえば、アタシ達いつから付き合つてんの！？」

はあ、やつぱり理解してなかつたか。

「付き合つてないよ、そつゆう噂が流れるから親しく呼ぶのは止めてつて話でしょう。」

「・・・へつ？・・・・・そつなの？」

残念そうにセイヤは聞いてきた。

「そつなの。」

「ぼくはきつぱり

「・・・・・うう～～～アカリー！」ワーン。

あつ少し犬化した。そしてなんで機嫌が悪くなるんだろ？

「ハイハイ、ご飯ね。」

こうして、僕の昼休みが始まった。

「そういえばアカリ、「暗闇通り」でなんでボーッとしてたの？」

「別に理由なんてないよ。しいて言うならなにか忘れ物ないかな、とか考えてただけだよ。」

そっけなく返す。

「嘘でしょ。ダメだよ嘘つこちやん。あつさり見抜かれる。

「相変わらずの、野性の勘だな。」

「でつなんで？」

「え」

不満そうに声を出す

「『めんねちょつ』と書いたくないんだ。」

だつて、不良に絡まれてたら女の子が毒吐いて不良を追つ払つてその上この学校のこと聞かれてその女の子がきた方向だと言つたら疑われて・・・なんて言いたくない。

「あう・・・なりこいや。」

こういうところは、セイヤのいいところだ。あまり人に聞かれたくないところは、野生の勘ですぐ気がつくから深く追求してこない。

「お詫びに、今夜は好きなもん作つてやるよ。」  
「普通、ルルンが熱湯ザ裏バニ―。

相変わらず肉食系だな。

「ハイハイ。」

そんな何気ない会話をしていたとき言つた次のセイヤの話は僕の体温を3。ほど低くした。

「そういうえば、こっちのクラスにね転校生が来たんだ。」

「・・・・・」

「どうしたのアカリ？ 滝みたいに汗かきはじめて。」

「・・・いや・・・なんでもない・・・」

まさかね、そんなわけないよ。第一「テンガク」の場所聞かれただけだし決めつけるのは早い。

「それで、転校してきたのがすんごくかつこいい女の子で・・って

どうしたの！？机にうつ伏して！大丈夫！？」

「・・・うん・・・大丈夫・・・」

そうまだまだ希望はある。かつこいい女の子＝毒舌さん（仮名）とは限らないし

「ううんそれでね、その転校生アタシたちより遅くってね3時間目ぐらいに来んだ。なんでも道に迷つたらしくって、でも「テンガク」は大通りににめんしてるから普通迷わないはずなのにね・・つてどうしたの！？固まって、今にも崩れ出しそうな状態になつて！」

「・・・いいから・・・続けて・・・

信じない、僕は絶対信じない。

「でつでね、その子の言った自己紹介の最後の言葉がよくわからぬいの。」「すぐ嫌な予感がする。

「ねえ、アカリ「ピ――――」つてなに?。」

「ダウト――――――――――

——ツツ——

間違いない毒舌さんだ！

「いきなり大声上げてどうしたの？」

ナニ ドーナツ ケンカガヤ ガヤガヤ ワイワイ

「ほらつ周りの人たちもいるし。落ち着いて。」

「セイバーリー！」

「はつはい！！」

六

「えつなんで？」

「なんでも、わかつたら返事！！早く！！じやないと晩ご飯野菜炒

「フツツノ！」

「なりいー。」

そうだよ、仮に毒舌さんが同じ学校にいようが同じ学年にいようがセイヤと同じクラスにいようが関わらなければ万事解決じゃないか。きちんとセイヤにも注意したし、第一セイヤと毒舌さんのクラスは6組僕のクラスは1組合同の移動授業でも一緒になることなんてないし、めったなことがない限り毒舌さんと会うわけなんてない。

「そうだよ。僕が気にしそぎなんだ。」

「・・・あの・・アカリ・・ちょっとこい？」

「ん? なに?」

「その・・・言いにくいくらいだけど・・・だからね・・・あの――・・・」

なんだよと聞い詰めようとしたとき。

「ワリーな星<sub>は</sub>夜遅くなつて。」

セイヤがビクウとなつて聞き覚えのある声が聞こえた。

「いやーこの購買以外に人気あんなの、おかげで前にいる邪魔なやつらのせいで遅くなつちつたぜつて・・・・・」

「・・・・・」

すくなく田<sub>た</sub>が合つた・・・

「おおつー? 今朝の黒髪ー! つーかさ、てめーなんで星夜と一緒にいんだ?」

「それは、じつちのセツフです。」

冷静にカウンターツッコミをいれる。

「ん? 僕か、いやー実はな・・・」

せひのむじいだ

両親の都合で、変な時期に転校となってしまいしかも大遅刻。てんぱつてしまつてどうすれいいかわからなくなつてしまいを毒を吐いて全員ドン引きしかしセイヤだけは変わらず（意味がわからず）普通に話しかけてくれて友情成立と・・・

「それでありまする?」

「ああ、あひてゐせ」

• •

儀を向かへるの才へとこへり

「い、いやーーすごいねアカリ簡単にまとめちゃうなんてさすが学年順位上位常連組ほんとですご」「晩御飯野菜炒め決定ー！」

「ワホー！」

バタン セイヤ ノックダウン

そうだよ、忘れてた。この犬つころ、人と仲良くなることについて  
は嘘を見抜くことより得意（無意識）なんだった。こいつ3時間め  
と4時間目の間に仲良くなりやがった。

「なるほどお前が星夜の言つてた幼馴染か・・・なんか女っぽいな。  
男の娘つてやつか」

わざと黒にしている」と言つやがつた。

「僕は男の娘じゃないです……」

「なんだよやけに警戒心むき出しだな、俺なんかしたか?」

「今朝のこと覚えてないの……」

「えっと……」

「僕に対して「黒髪以外ブス女」って言つた…」

「あ～言つたな」

「この……いい加減に！」

「ゴメン」

僕の怒りが爆発しそうになつたとき毒舌さんは深く頭を下げるや  
まつた。

「……えつ？」

予想外の行動でフリーズする。

「本当にゴメン、あの場合その場に居た全員に毒吐かない効果薄  
くなっちゃうんだ。仕方なく言つたとはいへ、本当にゴメンなさい。」

「…………はあ…………わかったよ。もう  
いいから頭上げて。」「  
でも……」「  
いいから」

毒舌さんは頭をゆっくり上げた。その顔はとても反省していた。

「もういいよ、僕も少し熱くなりすぎた。それに助けるために毒吐  
いたんでしょ?思つてたほど悪い人じゃないし。」

変な人だけど

「 もうか、ありがとう。・・・それじゃあ改めまして雲日陽射くもりひひがつだ。ヒザシと呼んでくれ。」

ヒザシは笑顔でてを差し伸べた。

「 うん、よろしくヒザシさん。僕は月明狩竜人つきあかりりゆうと」

僕はヒザシと握手をした。

これがクラスメイトがいる中で、すんごく恥ずかしいやり取りをしたヒザシさんとの、きちんとした出会いだった。

## 第四話 「お風呂イベントは間違った系」（前書き）

初のヒロイン視点導入

第四話 「秘傳叫べフトサ間連ニ系」

2011年4月29日

くもりびひなこ  
雲日陽射と最悪な出会いと意外にきちんととして、そこそこな好印象

な  
!

別にいいだる、ワインバーくらい。

「ほら、セイヤよこな」また作ってあげるから。」

セイヤの頭をなでる

「ウ～～～・・・クウン」

おやほし大ほしな星夜はよし俺も……

エサシちゃんセイドウをなでる。(あくね)

「ワン！（がぶり）」  
「いつた――――――！」  
「こら、セイヤ！ダメでしょうー。」  
「グルルルルルル。」

「あとヒザシさん、僕男の娘じゃないから、後勝手に人のモノとつ

「ちやダメだよ。」

そこそこのは、さすがに無視出来ない。

「そんじゃアカリ、俺のぶんの弁当も作ってくれよ。」

「ん？別にいいよ」「ダメ！アカリのお弁当を食べる権利があるのは、幼馴染の私だけなの！」

「えーー別にいいじやん。」

「ダメッ！絶対ダメッ！」

「ちえつ、わかつたよ。」

「いやいや、決定権あるの僕だからね。」

・・・自分でもびっくりするほどなじんでいた。

「それにしても第一印象とは、全く違うよね・・・」

僕は、ヒザシさんのほうを見ながら呆れ半分な感じでつぶやいた。

「そりなのか？」

「そりなんだよ。」

「どこらへんが？」

「・・・怒らない？」

「俺の第一印象怒るようなことなのーー？」

「だつて・・・」

普通、助けてくれたとはいえ不良と赤の他人にいきなり毒を吐くような人に好印象なんてもたないし、逆にこれからは関わらないようにしようと考えるのが一般的だと僕は思つ。

「あー！でも第一印象が怒るよいんだも、全然違うわ！」  
今は好印象つてことだよな。」

「うん……まあね。」

嘘は言つていない。

実際、ヒザシちゃんは皿つわは悪いし見た皿は不思ひほにかざ語して  
みればかく楽しげ、そしてなにより・・・

「そりだ、イイこと思いついた。弁当作つてくれないならが、今日  
晩飯食いに行つていいか？」

「はあー？ なんでヒザシちゃんがアカリの家に」飯食べにこくのや  
！」

「別にいいじゃん、それにわつれ言つたよ！」決定権はアカリにあ  
るんだしさ。」

「ウ~~~~~」

・・・毒を吐いていない。・・・いや当たり前つかや当たり前なん  
だけど、今のところセイヤから転校したときにテンパつて間違えて  
毒を吐いたって話しか聞かないし・・・

「・・・リ・・カリ・・アカリつばー。」  
「くつ？」  
「どうしたのアカリ？ ボーッとしきりやつて？」  
セイヤが顔をのぞき込む

ドキッ セイヤといえど、いきなりこんなに近くに来ると恥ずかしいな。

「ちよつちよつと考へ事してただけだよ。」

「まかしながらセイヤから離れる。

「そんなことより晩飯の件、別にいいだろ?」

「えつ・・あーセうだね、まあ別に断る理由ないし。」

「うつしゃー」

「ちよつとアカリなんで〇〇するのセー。」

「だから断る理由ないからだよ。」

「ウ~~~~~」

「それにアカリが、なんでヒザシさん娘家に晩飯食べに来る」と

反対するの?」

「なんであってそれは・・・その・・・」

なんでモジモジしてるんだ?」

それにて、なぜか普段はヒザシさんと仲っこいのに僕のことが絡むと色々意見していく(ところより不満をぶつかる)。

なんかヒザシさんが考へ込んでる。

「・・・・・」

「じつじたのヒザシさん?」

「えつ、いや別に・・・そんなことよつさアカリは何が作れるんだ?  
?」

「ん～～ 基本レシピと材料がそろえればなんでも作れるよ。」

「んじゅ～～俺は和食食いたい！」

「和食？」

意外なジャンルだな、ヒザシさんはきっとヤイやと同じ肉食系だ  
と思つてたの！」。

「作れない？」

不安そうに聞こえてくるヒザシさん

「大丈夫、作れるよ。」

「ホントか！」

子供みたいに喜ぶなあ。

「え～～～お肉じゃないの？」

「セイヤはお肉食べすぎなの」

「う～～～・・・まあいかアカリの料理はどれも美味しいしね。」

「じゃあ悪いけど、帰り道一人で醤油買ってくくれない?・ちょうど

ど切らしてて。」

「アカリは?」

「ちょっと靈行<sup>リョウキ</sup>きが怪しくなってきたから、先に帰つて洗濯物取り込まなくちゃ。」

「わかった。」

まへんじへんかへんじへん

「んじゅ、よろしくなアカリ。よしにいりやか、星夜。」

「あつ、まつてヒザシちゃん。」

「またね。」

さて次の授業はなんだつたつけな。

視点  
澄空星夜

「星夜はなんでアカリのこと好きなんだ?」

• • • • • • • • • •

あれーおかしいな幻聴が聞こえる、疲れてるのかな?そんなことよりお醤油買わないと。

「ねえ、アーチャーさん。

「ん、  
なに？」

「お醤油にも薄口とか濃口とかあるけど、どれ買えばいいのかな?」

「テキトーにCMで流れてる有名なのでいいんじゃねーの。」

それしやあ これでいが

「いいと感づぜ、それでなんでアカリのこと好きなんだ?。」

あれ？ 幻聴じゃない・・・ あーなんだヒザシちゃんが質問してるのか。 えーっとなんだつけ・・・ アタシがアカリを好きな理由か・・・

顔が赤くなるのがわかるぐらい熱くなつた。

「落ち着け、キャラぶれてるぞ。はい深呼吸。」

ス——ハ——ス——ハ——・・

「んでどうして好きなの。」

「ボフウツ ゲホッゲホッゲホッ ハアハアハアハアア いついき  
なりなんでそんなこと聞くの！？てゆーかなんで知つてんの！？」

「そつそつなの?」

「そつ・・・・なんだ・・・・。

つつつまりアカリ自身も知ってる可能性もあるかもしけない、とゆうことは・・・・・

『セイヤ、やつと二人きりだね。』

『どうしたのアカリ?』

キヤツ

『もつ我慢できない、今日からセイヤ・・・いや星夜は俺の本当の犬

《あつアカリ～～～～らめえ～～～》

「んで、そのあとにあんなことやこな」とも……（ハアハア）」

「妄想中悪いんだけど、アカリは全然きついでないよ。」

「ワーン！？（マジで！？）」

「犬化しないでくれ。」

「たつ確かに、きついていれば今までチャンスはなんどもあつたしね……はあ。」

「それでな、なんでそんな」と言つたのかつづーと、俺は別にアカリを取るつとしてるわけじゃねーから普通に接してくれつてわけよ。

「うつ・・・『メン・・・』

「いいよ別に。応援してたから頑張れよ。」

実際アタシは、もしかしたらヒザシはアカリが好きで取られると思って、セイヤが絡むと色々意地悪なことを言つてしまつた。それなのにヒザシちゃんは・・・

「うえ～～～～～ん、ヒザシちゃん～～～～。」

「どうしたいきなり！？」

「うえ～～～～～ん。」

「分かつたから泣くなよ！」

「うんわかつた。」

「泣き止むのはやつ！」

「元気なのが取り柄だからね ミ」

「・・・さじですか。」

「いや～～それにしても、土砂降りなんてスーパーから出るまでわ  
かんなかつたよ。」

「ホントに最悪だな。んでこいがアカリの家か？」

「うそ、私の家はこの家の右隣なんだ。だからこいの家は、アタシの  
第一の家みたいなもんなんだ。」

「ふーん。」

「それにしても・・・ビザシちゃんもやつぱつ女の子なんだね。（  
ジーー）」

「はつ？・・・おっお前なに見てんだ。」

「そんな」とこつたつて今アタシたちは雨に濡れてびしょびしょつま  
り・・・

「透けてるんだから、見るなって言われても無理でしょ。」

「それでも見るな！」

「アタシより大きい」

「だから見るなー！」

「ゴメンゴメン、お風呂場行つてタオル貸してもいいつー。」

「全く。」

「やつこい。」

「おこ、靴ぐらきちんとしておけよ。」

「やつとこで、タオル持つてくるから。」

「のときアタシは予想しておけばよかつたんだ。

こんなに玄関で騒いでも来なかつた。

「がちやつ・・・・・あつ  
ピタツ・・・・・えつ」

幼馴染の存在を。

「あの・・・その・・・」  
「これは間違いで・・・だつ大事な部分はバ  
スタオルで・・・見えてないから・・・その・・・  
・・・ふうん・・・だから?」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ  
なんかドス黒いオーラが見える。てゆーか普通お風呂イベントって  
逆じやね?なつなにか言わないと!

「あつアカリ!」

「なに。」

なつなにかいいセリフを!

「すんげ——綺麗な肌してんな、女の子みたいだ!」

ぶちん

なに今の音！？

# 死を覚悟した瞬間

「なにやつてんだセイヤ?」

「えりヒガシセー！？」おわあ

「アーティスト」

バタン

「いつたたたたた・・・あつ。  
いつててててて・・・えつ。」

・・・・・・・・ 状況を説明すると、シャワーノズルに足を引っ掛けたアカリ（半裸）がアタシ（服が透けてる）の上に倒れてきて覆いかぶさつっていた。これをヒザシちゃんが見ている。

「な・・・なに・・・してゐの？」

「・・・・・えつと・・・た・・・」

「・・・・・た?」

「正しごお風呂イベント？」

「なわけあるか!」の「ペ—————」が——。」

「……」

## アカリのシテ　三　か響いた

第四話 「お風呂イベントは間違い系」（後書き）

そろそろ主人公の姉出したいなあ

第五話 「お姉ちゃんは変態系」（前書き）

主人公姉登場

## 第五話 「お母ひめと変態系」

2011年4月29日

視点 くもつび 曇田陽射 ヒザシ

「ヒザシかどじめんね、変なといひ見せひやつて。」  
セイヤがテーブルにお箸をそろそろながら謝る。

「わしここで壊つてんだが、別にわざとじやないんだし。」  
俺もセイヤを手伝いながら返す

「でも・・・」  
「だからこいつで、俺も言こすきたし。そんなことよつ・・・  
「ん、ギリしたの?」  
「いや・・・もうここんじやなこいか?」  
「なにが?」  
「なにがって・・・」(ナラシ)

俺はとなつの部屋を見る、そこからは・・・

「アカコ~~~~~(ドン) もんなか~~~~~(ドン) ヒーヒーヒーヒーヒー(ドン) かがり

だして~~~~~（ドンドンドン）」

「さあセイヤちゃんーあきらめぬきぬきのメイド服を着る  
んだよね？」

「いや――」「やーーんやーーめーーてーー」

バタンバタンドーッ マテー ヒー イヤー

・・・なんかセイヤの叫び声が聞こえる

「大丈夫、うちの「月明狩虎子<sup>つきあかり</sup>」<sup>月明虎子</sup>って名前で、見た目だけならすん<sup>ん</sup>」<sup>く</sup>綺麗  
いから・・・・・多分」

「多分！？」

セイヤのアネキツヒヅんな人なんだよ

「つむの姉は月明狩虎子<sup>つきあかり</sup>って名前で、見た目だけならすん<sup>ん</sup>」<sup>く</sup>綺麗  
なんだけど・・・」

「だけど？・・・」

「いや――ほんとにやめて！」  
「よくでわないか、よくでわないかなんだよね？」  
「よくないですから――――！」

「その涙田そるんだよね？」

「聞いてのとおりの女の子ずきで、特にセイヤが大好きなんだ。ま  
あセイヤのほうは苦手なんだけどね。」

「よつよつ今までこの家にセイヤは出入りできたな。」

「「「姉はウルトラーノだから。」

「ウルトラーノ?」

「ほりっウルトラマンって、地球じゃ一日3分間しか動けないでしょ?」  
「「「姉は、自分の部屋から一日3分間しかでられないんだよ。

「それダメ人間じゃないの!?」

「うん、そうだよ。」

あつさり肯定しやがった!

「いやいや自分の姉だろが!」

「まあ事実だし……でも、株とFXで稼いで生活費と学費は払ってくれるから結構いい姉だよ。」

「ネオーネーだよなそれ!?」

・・・あれ?生活費と学費?

「なあアカリ、お前の親は?」

「・・・・・」

あれっ?なんで黙るのもしかして地雷踏んだ!?

「なあなあアカリ」「アカリ~~~~(ドカンッ)たすけて——」  
セイヤがドアを突き破ってきた。

どんがらがつしゃーーん・・・

「いつててててて……えつ。」

「いつたたたたたた……あつ。」

あれっなんか少し違うけどデジャブ？

「……あの……その……いや……わざとじやなくて……」  
あへへこりゃまた怒られるな……と思つたら。

「せつセイヤ早くどいて。（カアアアアア）」  
アカリがなんか赤くなる……あつそつゅう」とか。

「どうしたの？怒んないの？」  
きずいてないのか。

「セイヤ自分の姿見てみ。」  
「えつ？・・・・・！」

セイヤは犬耳と犬手袋をした状態で少しみだれたメイド服を着てアカリの上にまたがっていた。

「・・・・・・わつワフ――――――――――――――――――」

こんなときでもワフ――――――――――――――――――――

## 第五話 「お姉ちゃんは変態系」（後書き）

次回は虎子の詳細書きます。後、年末年始は休みます。

## 第六話 「恋バナは暴走系」

2011年4月29日

「改めまして、リコウちゃんの姉でセイヤちゃんの恋人の「月明狩虎子」なんだよね? ポロシクなんだよね? ヒザシちゃん。」「彼女じゃないのですよ!」

ちなみに竜りやんとは僕の冗談である。そしてこれは「姉の部屋

「よろしくお願ひします。えへへと・・・」「△△さんでいいんだよね? もしくせぬ姉でもいいんだよね?」「遠慮しておきます。」「残念なんだよね?」「△△姉が肩を落とす

「どうりで△△さん。こいつが質問にいですか?」「ん? なんなんだよね?」「ちょっと見た田の質問なんですね? えーと上から・・・」「もうこいつどじやないですか?」「違うんだよね?」「はー、ぶっちゃけかないといつもあつませんから・・・色々と・・・」「まあ△△姉はモテルみたいだからね。」「

「「姉は、出るとこ出でるしそうまるといひはしまつてゐるし身内の  
僕から見ても完璧なプロポーションだし、とてつもない美人だ。で  
も・・・」

「ありがとうなんだよね？お礼に今日は可憐がつてあげるんだよね  
？（ハアハア）」

「全力で拒否します。」

「またまた残念なんだよね。」

ホントなんでこんななんなんだ？

「それで、ココ姉に聞きたしたことってなに？」

「いや、アカリでもいいんだけどさ、なんで髪の色がセイヤが黒髪  
でココさんが白髪なんだ？」

しまつた！（ビクウ）

「あ～～それはなんだね？リュウセイ」「ココ姉は遺伝の関係上そ  
なつちやたんだよ！特に！全然！これっぽっちも！深い理由なん  
てないから！」

僕は全力でヒザシさんに理由を説明する

「そつそうなのか。」

「そつなんだよ。」

「こや童ちゃん、そつじゅ「セイヤー・ヒザシさん・お腹すいたで  
しょー・もう晩ご飯出来るからビンググ行こう。」ココ姉にもすぐ持  
つてくれるから。」

「ちよつセイヤどうしたんだよ？こぎなり？」

「ここから早く！」

「わよつとまつてアカリ、ヒザシちゃん。」

無理やりヒザシさんを引っ張り出す。その後からセイヤもついてくる

「あつちよつとみんな・・・あへー行つちやつたんだよね?もしか  
しなくても、竜ちゃんまだあのこと話してないんだよね?少し失敗  
しちゃつたかななんだよね?」

「うんめえ~~~~~!!アカリお前は天才なのか!?.ですが男の  
娘!」

「それほどじやないよ。後、男の娘じやないで言つてるよな僕(イ  
ラッ)」

なんとか髪の色の話題はさらせたな。

「確かにこれはセイヤがほれ」「わーーー本当にこの煮物美味しい  
ね!」

いきなりセイヤがほめる。そして、ヒザシさんと後ろをむいてヒン  
ヒソ話し始めた。なんどうづ?

(ちょっとヒザシちゃんに言おうとしてんの!?)  
(わりいわりい、でもさあアカリは全然きずいてないし。俺が仲介  
役として仲をもつたほうがいいんじゃないの?)  
(別にいいの!)

「ねえ、なに話しているの？」  
「いじりしくなり聞いてみる

「えつ・・・いや・・・その・・・あつ恋バナだよー。」  
「ヒザシちゃんそれ禁句ー！」

「えつ？」

恋バナ？（びくつ）

（ガタン）

「えつなにどうしたの？俺なんか変なこと言つた！？」  
「アカリ落ち着いて！」  
「はつしまつた。そうだよね僕だけがしゃべつても詳しいこと話せないもんね。でつどっちの話なの？」  
「どうしたんだよ正直テンションが「ペ――――――」で「ペ――――――」で「ペ――――――」なんだけど。」  
「毒舌はいいから、早くー。」

僕は真実を確かめるべく問いただす。

「えつなにどうしたの？俺なんか変なこと言つた！？」  
「アカリ落ち着いて！」  
「はつしまつた。そうだよね僕だけがしゃべつても詳しいこと話せないもんね。でつどっちの話なの？」  
「どうしたんだよ正直テンションが「ペ――――――」で「ペ――――――」で「ペ――――――」なんだけど。」  
「毒舌はいいから、早くー。」

（ちょっと）「れどうゆづ」と？毒舌効かないんだけど。（アカリは三度の「飯より恋バナすきなんだよね・・・暴走するぐら

い。）

（マジで...どうすればいいんだよ？）

（普通に恋バナ聞かせればおさまるけど・・・）

(よし任せた。)

(なんで！？)

(考えれば告白するチャンスじゃね？)

(無理、まあ似たようなとき告白したら「冗談とかじやなく眞面目に恋バナ語れや！…」って激怒されたから…)

(うわあ・・・)

(そつちこせなにかないの)

(へつ？いっいや・・・そつその・・・)

(その反応あるんだね。じゃ、任せるよ)

(いやつちょっと・・・)

「実はね、ヒザシちゃんの恋バナなんだ！」

「そつなんだ！でつどんな恋バナ！？失恋系、片恋系、成就系、泥沼系、どれよ？」

(なんか、無駄に詳しいんですけど…)

(腹をくくったほうがいいよ、こうなると止められなーから。後個  
人的に聞きたいし。)

(うへへへ・・・分かったよ。)

「絶対に笑うなよ。

「笑わないよニヤニヤするだけ。」

「てめえ・・・」

「落ち着いて、もつじょうがないから。」「ぐつ・・・」

「んで、なに系」

「新幹線見たく言つんじゃねえよー。」

ワクワク ワクワク

「そつ・・・その・・・片・・・恋・・・系・・・

「ヤー ヤー ヤー ヤー ヤー

「相手は？」

「そつその・・・あつ 相手は・・・」

「ヤー ヤー ヤー ヤー

「つ・・・・・」

「つ・・・・・」

「月の狩人つきかりゆうじんだよ。なんか文句あつか！」

瞬間、俺とセイヤが固まる。

「へい？」

「なつなんだよ一人そろつて聞き返して。」

「・・・・・」

一人で顔を見合させる

「ええ

」

「ちょっと驚きすぎじゃないか？まあ理由はわからなくもないが。  
『いやいやいやそつじゃなくて実はム『コウ』

僕は速攻でセイヤの口をふせぐ。

ス——ハ——・・・

「どうして月の**狩人**を好きになつたんだ。」

「なつなんだよ急にシリアスになつて。」

「いいから答**え**て。」

「そつその・・・あれば中一の秋のことだ・・・」

そつと云つてビザンさんは話を切り出した

第六話 「恋バナは暴走系」（後書き）

次回、  
くもりび  
曇日陽射過去話

## 第七話 「過去話はシリアス系」（前書き）

タイトルがつかつか悩みました。  
結果ペリパーになりました。

## 第七話 「過去話はシリアルス系」

2009年10月17日

視点「曇日陽射」  
くもりびひやし

「たぐつ 嫌な天氣だな。降んなきやいいんだけど。」

雨雲のせいで、せつかくのショッピングも気分が乗らない・・・いやこれは自分への言い訳か。

「なんで俺が文物の服なんて・・・いやしじうがないか。」

俺は昔から男まさりの勝気な性格で、小学校卒業するまでは男の子と遊んでいたぐらいだ。中学生になるときにはちゃんと親しい女友達もできて、昔の男友達と遊ばなくなつた。しかし中学校では少しだけ周りの女友達とズレがあつた。

ズレといつてもいじめというわけじゃなく「とても仲のいい男友達」みたいな、そんなかんじに友達から扱われるのだ。

それが俺は少しいやだった。

しかし、それはみんなが無意識でやつてこるもので注意するのもなんか気が引ける。そこで俺は・・・

「うーん・・・どんな服がいいんだろう?」

実は、次の日曜日仲のいいクラスメイトと映画を見に行く予定なのだ。そこでいつもよりおしゃれで女子っぽい格好していけば、みんなの態度も変わるはず……しかし

「やっぱ事前に調べておくんだったな。」

いつもジャージだからどれがいいのかわからんねえ

「どうしよう。」

「どうかなさいましたか？」

途方にくれていたところ店員さんに声をかけられた。

「えつ？・・・！・・・あつあの・・・その・・・ええつと  
ヤバイいきなり声かけられたから、なに話でいいかわからんねえ  
わーーーなんだよ可愛い服つてーー！」

「承知いたしました。では、こちらの服はどうが？」「  
「はつはい。いこと思います。」「  
「では試着室はこちからです。」「  
「はつはい！」

そのまま流れで試着することになってしまった。しかし……

「「うつこれを俺が着るのか。」「  
手渡されたのは、フリフリのついた白い、いかにも女子っぽい服  
だった。

「こつこいやこじで着なくちゃ女じゃねえ！」

自分でもなに言つてんだと心の中でシッコリながらその服を着る

「すっすいません。」

「はい、なんでしょうか？」

「「」の服似合つてますかね？」

「すゞく似合つてらつしゃいます。」

「ほつ本当ですか！？」

「はい。とても可愛いですよ。」

「カツ可愛い（カアアアアア）」

可愛いなんて両親意外に言われたことがない……。

「他にも色々とお似合いそうな服があるんですけど、どうなさいますか？」

「試着します……。」

「いや～いい買い物したな～！」

あの後、店員さんに褒めてもらつた服を着てそのほかに買った3着とアクセサリーショップで買ったブレスレットを身に付けた俺は超上機嫌で公園のベンチで休んでいた。

「つい昨日までなら、ショッピングになんてあんなに時間かかるんだよって思つてたけど。今ならその理由が手に取るよつてわかるよ。」

改めて俺も女の子なんだと再認識する。

「やつぱれからまゆつと女の子うしべするべきだな。（つづき）

「

一人で頷く俺……。

「今度から「俺」じゃなくて「私」ついに言おつかな。」  
そうしたほうがいい、せつかくの機会だしこれからは女の子っぽく  
しよう。そつそしたらかつてこのかつかか彼氏とかも出来るかもし  
れないし!」

そんなことを考えてたら後ろから声をかけられた。

「ねえ君～～一人～～可愛いね～～」  
「かつ可愛い！」  
「じゃねえよ俺！～～じゃなくて私～～こんなふうに声をかけてくるつ  
てことは～～」

「ねえオレ～～とお茶しない？」  
「ケツコ一楽しいよ。」  
やつぱりナンパか。しかも3人

「結構です。」  
「可愛い服着てるのに、結構シンシンしてるね。」  
もつ～～ウザイな

「用事があるんで。」（タツタツタ）  
「いつも場合は逃げるが一番、それで近くの交番にでも駆け込もう。  
「お～～～君これ忘れてるよ。」  
「えつ？あつ？」  
しまった

ナンパしてきた男の手にはわざわざ買った服やブレスレットが入った  
紙袋があった

「返してくださいー。」

慌ててもどつて返却を求める

「ん～～どうしようかなあ～～お茶に付き合つてくれたら考えてあげるよ。」

「ふざけんな返せー！」

つい、いつもの男口調で文句を言つてしまつた

「あっ・・・てめえ・・・少し優しくすりやあつけあがりやがつて・・・

「優しくしりなんて頼んでねえだろ！…」

「そつかよ・・・オイでめーらそいつ抑えてろ！…」

「了解」

「わかったよ。」

「テメツ・・・この・・・はなせー！」

両腕を後ろでつかまれて動けなくなる

「大丈夫だよ、テメーみたいなガキ殴つたところで面白くねえ・・・  
だから・・・」

男は紙袋の中身を地面に落とした

「なにすんだーー。」

「こつするに・・・決まつてんだー。（グシャア）」

男が思いつきり中身を踏んづける。

「ああつー。」

「こいつ「ああつー」ていったよ。」

「うわーーひつでーーでもウケる。」

男達がケラケラ笑う。

「止めるー。」

せつからく買つたのに・・・

「えへへ聞こえないと（ダンダン）」

「止めろって言つてんだろ」

初めてオシャレしようと恵つたのに・・・

「だから全然聞こえませへん。（グリグリ）」

「止め・・・で・・・」

クラスのみんなに見せたかったのに・・・

「あーーあーーきへーー」へへへへへ（グシャア）」

「止め・・・で・・・よう・・・お願ひだから！止めてよお！」

楽しい思い出になるかもしぬなかつたのに・・・

「止めるわけねえだろ、バアア力」

「うつ・・・うわああああああああ・・・止めてよ・・・お願ひだか  
ら・・・お願ひだから・・・」

変わらうけど・・・思つたのに・・・

ヒュン ヒュン ヒュン

なにかの音がした気がした。

「つるせえな！元はテメエが悪いんだろ？がー…」

男が腕を振りかぶる

(殴られるー)

「ちよつお前ー！どうしたんだその傷！」

腕を抑えていた不良のうち一人が殴りかかるつとする不良に言つ。

「あつ？なつなんだこれー！痛てえー！お前ら！こやー！どうしたんだその傷。」

「なつなんで血が！？」

「wh y!? 痛てえ yo!」

(なにが起こったの？)

男達はそれぞれ、殴りかかるつとした腕、後ろでつかんでた手が少し切れていて血を出していった

「どう？狩られた感想は？」

「はあー!？」

公園の入口から声が聞こえる

「なつなにもんだー!？」

ヒコーン ルコーン ヒコーン

(まだだ、なにこの畜)

「別に君たちに名乗るためには近づいたんじゃなーから、どうでもいいけど早く止血したほうがいいよ。今度は右肩を狩ったから。」

「はつ~うつうわあーーー！」

「なんだー! いつのまーーー！」

「痛でぇ ゆおーーーーーーー！」

いつのまにか不良3人の右肩から血が出ていた

「要件は二つ。1、その子から離れて。2、視界から消えて。早くしてくれる? そうじやないと・・・」

「次は命を狩るよ。」

「うわあ――――化け物――――！」

「まつてくれ！おいていかないで！！」

「h e l p m e 助けて――――！」

「・・・・（ポカーン）」

「これはひどいね。」

いつの間に不良を追っ払った人が近くに来ていた。

夕方で、しかも曇のせいか顔はよく見えない。しかし、輝いている  
ような白髪に獸のような鋭く大きくそして美しい一本の爪はよく見  
えた

「あ～～こんなに可愛い服なのには。本当なら動けなくなるまで狩  
ろうと思つたんだけど、さすがにそんなグロテスクなところは女の方  
子には見せられないしね。」

「・・・俺の・・・服が・・・つ・・・う・・・う・・・は・・じ・  
め・・・オシヤレ・・・しょ・・うと・・・思つたのに・・・」

卷之三

ノルマニカノセ

怒りよりも・・・

悲しみよつも・・・

毎日新聞社

なにより挫折感だつた。

「変わらなくとも、いいよ。」

頭に手が置かれる。その手はとても暖かかった

「変わらなくてもいい! だって君は・・・」

「今だつて十分可愛いから」

その後のことによく覚えてない。

気がつぐと自分の部屋のベッドで寝ていて。お母さんと話を聞くと昨日はふらりと帰ってきて晩飯もお風呂も入りずに寝てしまつたと云つ。

最初はあれは夢なのではと疑つたが。ボロボロの服とブレスレット  
が紙袋に入つていたので夢ではなかつたらしい。

その日から、よくあの人の夢を見るようになった。夢から覚める度  
心地の良い胸のドキドキと切ないような胸の苦しさに襲われた。

助けてくれた人が月の狩人と噂で分かつたのは一ヶ月後  
つきかりゆうとひそひそ

そして、夢から覚めたときの感情が恋心だとさすいたのはもう少し先のことである。

## 第八話 「友人も変態系？」

2011年 4月29日

「・・・という訳だ。なんか質問とかあるか？」

ヒザシさんの恋バナが終わり、いつもの僕なら根堀り葉堀り聞く質問タイムになつたのだが・・・

「・・・・・・・・・・・・」

「どうした、アカリ？心ここにあらずみたいな顔して？」「ンンーーンーーンーーーーーーーー！」

「後、セイヤの口そろそろ開放してやれよ。」

「・・・えつ？・・・あつごめん！」

すっかりセイヤの存在を忘れていた。

「ふはあーハアハア・・・・ヒザシちゃん今の話ホント？

「あつああ、ホントだぜ。」

「ふーん・・・・・つまり月の狩人は知らない女の子に可愛いとか言っちゃうキザ男なんだね〜。」

「そつそつだね〜。」

いやーお茶がうまいな〜〜（ズズ〜）

「そんなこといはよ。一応未来のお嬢さんになる相手だぞ！」「

へ〜〜未来のお嬢さんにね・・・・・・

「ボフアアツ ゲホッゲホッ ヘホッ なにのいってのんおーーー？」

「落ち着いて話してくれないかな？」

「ニギヤハトムガハセー。ガクシードシメ。」  
「なにが?」

九  
七

いやいやいやなんでわからぬの！？

卷之三

そのために

「そんな！」とよつ！？

あれ？この状況で使う言葉だつけ？

「セイヤがなんか恐いんだけど。」

「えつ？」

「セイヤーたーん！！」

訂正します。「せんなり」とよつて「せんなり」とひらがなで使われるの

でした。

「ちよつとセイヤ恐いよーー。どうしたのー? ねえーー。正気に戻つて

! ! !

僕は心の底からセイヤに訴えた（軽く半泣き）

僕は心の底からセイヤに訴えた（軽く半泣き）

# つきの話の真相はナニ?

「よし、こいつのヤバイだ。」

「それもひどくね？」

そんな」とよりも今は解決すべき問題がある！！！

ג' ינואר עסניאן רפאל גאנז-הנני

「せつだみヒザシひやん……こつからなのー?」

「えつと・・・なにが?」

「「なんで月の狩人と結婚することになつてんのー!?」」

「俺が惚れたからだーー！」  
「なんでつて・・・・そんなの・・・・？」「そんなの・・・・？」

「……………」

「でつ？てなに？」

「いやいやなにかかるでしょうほかにも。」

「告白したとかされたとか。

別にないよ。

## なにこの沈黙

「えりと・・・つまり一度しか会つたこともないし皆田もなんにも

גְּדוֹלָה מִזֶּה

「…………無理じゃないの？」

「無理じゃない！なぜなら・・・」

「俺が月の狩人を愛してゐるからだ――！」

「・・・・・（完全に危ない人だ）」

「どうしたんだ？」

「・・・なんでもない。」

「・・・うん、あたしも。」

「そりゃ？」

今日は友達の意外な一面を知りました（知りたくなかつた）

ティロリン 僕のケー・タイが鳴る

「ん？ 電話か？」

「いや、メール・・・ココ姉からだ・・・えつ！？」

僕は慌ててカー・テンを開け外を見る

次の瞬間 ザアアアアアアアアアアアアア

豪雨が降り出した。

第八話 「友人も変態系？」（後書き）

お泊りフラグ発生！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7675z/>

---

このこのこ！～男の娘のこんな日常～

2012年1月5日20時49分発行